

随 筆

田舎暮らし雑録

北川 勝弘

はじめに

今年（2018年）で、私たち夫婦の愛知県岡崎市東部の山間地における田舎暮らしも、14年目となった。この間に広がった地域での交友関係や様々な見聞は、私たちの“老後の人生”に彩り豊かな心地良さをもたらしてくれている。若い頃に思い描いた自分たちの“老後像”と比べて、とても明るいものになっていると、日々実感している。本稿では、田舎暮らしを通じて得た私の体験や見聞中からいくつかエピソードを拾い上げ、書き留めてみたい。

1 わが家の屋根塗装

私たち夫婦が移り住んだ家は、その時点で“築11年”の鉄骨製でやや広めの家だったが、今年で“築25年”になるので、さすがに、家の補修については検討すべき点が多々ある。その一つがベンガラ製屋根や外壁の塗装。未だ雨漏りはしないが、緑色の屋根の一部が赤茶色にけば立っており、近所の知人からも「早いとこ塗り直した方がいいぜよ」と、忠告された。

わが家には、毎月2回の詩吟とオカリナの練習時に7～8人の友人が訪れるし、毎年10月中旬にはわが家の畑で行なう岡崎年金者組合の芋掘りイベントに40名ほどが来訪する。また、毎秋11月の年金者組合「芸能祭」に向けては、私たち組合員の自作演劇用の大道具・小道具の制作会場ともなる。それで、妻は折ある度に「家の汚れた屋根や外壁をきれいに塗り直して、皆さんを迎えたい」と、話していた。そこで、相談の結果、今年中に屋根と外壁の塗装を行うことにし、夏の初めに業者に工事を発注した。業者からは、工事の作業期間は9月初めから3週間半と提示された。

今夏の天候は、記録的な猛暑日の連続と共に、日本直撃型の台風襲来が多かった。9月に入ってからもなお、新しく襲来する大型台風の影響で雨天の日が多かったが、兎に角、所定の期日までに工事は完了した。屋根と外壁の塗装結果は、従前に比べて見違えるほど、彩り豊かな外装に“変身”したので、妻が大喜びしたことはいうまでもない。

昨年の正月、私はたまたま、山里生活の中で“終活を考える”機会に遭遇した（本誌第52号（2017年10月発行）の拙稿を参照）。それ以来、現在の住まいを果たして“終の棲家”としうるのかどうか、私にとって新たな検討課題となった。しかし、よくよく考えてみれば、夫婦のどちらかは、連れ合いがあの世に旅立った後も、山里生活の継続を選択する可能性は十分あり得るので、現在の住環境を今後とも気持ちよく住み続けられるように整え、維持し続けていくことは、当然の配慮ではないか。そう思い至った私は、素直に妻の希望を受け入れたのだった。

2 里山での登山道整備活動—ある“遭難事件”と登山道標識

私が加入している岡崎年金者組合を母体とする登山サークル「軽登山・里山ハイキングの会」（以下、里山会と略称）は、今年の4月下旬に、岡崎市南東部の鳥川町にある市営「ホテル学校」と共催で、“新開拓登山道のお披露目トレッキング”を開催した。里山会が昨年から今年にかけて半年間、新しい登山道を開拓し、そこに自分たちが制作した登山道案内看板（標識）を現地に設置してきた状況を、多くの一般参加者に歩いて体験してもらおう、という趣旨の企画だった。

この「お披露目トレッキング」の最中に、一人の女性参加者が行方不明になる“遭難事件”が発生した。岡崎市の広報誌で本企画を知って参加したという彼女は、あまり里山歩きには慣れていなかったようで、休憩時間中に他の参加者たちから離れた際に、戻るべき登山道を見失ってしまったらしい。出発後、まだ早い時間だったため、何とか自力で出発地点のホテル学校へ戻れたので、大事に至らずに済み、主催者側一同はほっとした。

彼女はホテル学校にもどった後、職員から、彼女が休息した地点の近くに登山道標識が無かったかどうかを尋ねられた際に、標識に関心を払っていなかったのが気づかなかった、と答えたという。私たち里山会メンバーは、この“遭難事件”から、案内看板の設置間隔や設置場所につき、（計画と設置の両段階で）より肌理（きめ）細かい配慮を払う必要があることを学んだ。

鳥川町での登山道整備活動は、2014年2月から里山会が会員の自主的ボランティア活動として開始し、講師 M さんの指導のもと、ホテル学校を活動拠点として利用させてもらって登山道案内看板を自分たちで制作し、地元のホテル保存会に協力して、現地に設置してきている（「ホテルの里の登山道整備と案内看板の制作」については、本誌第50号（2015年12月発行）の拙稿を参照）。

最近、里山会が登山道整備活動に取り組んでいることを知って、時間の都合

がつく限り、自主的・系統的にこの活動に参加してくれる人が、何人も現れるようになってきた。そうした中で、登山道整備活動自体も、最初は風雪に晒されて文字が読み難くなった旧来の案内看板を更新するための取り組みが主だったのが、やがて、いくつかの新しい登山ルートの新設に取り組むようにまでなってきた。来たる冬期には、ホテル学校の北方に位置する愛宕山まで、ホテル学校から比較的短い距離で容易に誰でも登れる初心者用の登山ルートを開拓しようと、目下、里山会の会員有志の間で検討中である。

3 文化財めぐりで知った「朝鮮通信使」の歴史

つい先日、何気なく新聞を眺めていたら、「世界記憶遺産の朝鮮通信使再現『日韓交流おまつり』」の見出しの付いた記事が目飛び込んできた（『中日新聞』（2018年9月10日付け・夕刊））。日本と韓国の文化交流を通じて両国の友好を深める目的で毎年催される「日韓交流おまつり」が、9月9日にソウルで開かれ、約6万人が来場した、との紹介記事だった。

私はたまたま去る3月中旬に、岡崎年金者組合内のサークル、「文化財めぐりの会」のバス旅行で滋賀県彦根市に出かけ、「第80回文化財めぐり」として見学した井伊家ゆかりの古刹が、江戸時代に「朝鮮通信使」が来聘（らいへい）した際に、その高官たちの宿泊所となっていたことを知り、記録の記事中で紹介した（『東海愛知新聞』（2018年7月5日付け））。

日本と朝鮮国との間の国交は、豊臣秀吉が朝鮮侵略を企てた文禄・慶長の役（1592・1597年）によって断絶したが、徳川家康はその修好回復を積極的に推進した。まず、対馬藩（現、長崎県対馬市ほか）の藩主宗義智を介して朝鮮国との和平交渉を進め、二代将軍秀忠の就任祝賀を名目として、親善使節の来日を要請した。その結果、1607（慶長12）年に朝鮮国から公式使節団467人が来日し、滋賀県内の野洲から彦根までは「朝鮮人街道」を往還した。朝鮮国使節団は、「信（よしみ）を通じる」という意味で「通信使」と呼ばれた“善隣友好使節団”であり、1811（文化8）年までの約200年間に、12次にわたって派遣された。

先述した「朝鮮人街道」とは、滋賀県野洲市で中山道から分岐して琵琶湖東岸を北上後、彦根市で再び中山道に合流する、約41キロの街道のこと。この道は、関ヶ原の戦いに勝利を取めた徳川家康が凱旋した際に通った「吉兆の道」（めでたい道）として、將軍上洛の通行時にのみ使われた特別な道であり、たとえ、大藩の大名行列であっても通行は認められなかった。しかし、徳川幕府は「朝鮮通信使」を国賓待遇とし、近江を往還する際には中山道ではなく、「吉

兆の道」の通行を認めた。鎖国時代に唯一の外交関係があった朝鮮からの外交使節団が往還したことから、「朝鮮人街道」の名がついたのである。このことから、家康が如何に朝鮮通信使の来聘を重要視していたかが、うかがわれよう。

今回、「朝鮮通信使」の件が昨2017年、ユネスコの「世界記憶遺産」に登録された、との新聞ニュースに触れて私を感じたことは、関ヶ原の戦いに勝利して全国統一を成し遂げた徳川家康が、極めて早い時期に、日本と朝鮮国の国交修復について着眼し、その実現に向けて着実な手を打った、彼の卓見の見事さ、という点である。関ヶ原の戦いからわずか7年後の1607（慶長12）年に、息子・秀忠に將軍職を譲ることとし、「二代將軍の就任祝賀」を名目として朝鮮国からの使節団派遣を要請し、日朝国交修復を実現させた。家康のこの深謀遠慮こそが、江戸時代260年余の太平の世を実現するうえでまさに決定的に重要な寄与をしたのである。

従来、家康像については、“ずる賢い狸親父”的な印象が、広く大衆的に振りまかれてきたように私には思える。だが、隣国との間で極力トラブルの種を残さず、平穏な関係を醸成し維持し続けることが、国内の治安維持にとって大きく影響したことは、明らかだろう。家康の人物像については、今日的な視点に立って、再評価されてもよいのではなかろうか？

ところで、家康が“国家の最高権力者”として決断・実践した国際戦略の見事さに比べて、現代のわが国の対外折衝の有り様は、卑屈な従属国の根性丸出しで、あまりにも見るに堪えない。現実の世界では国家間の紛争の種が多数存在するが、それら紛争の種の解決に向けては、軍事力ではなく、粘り強い外交交渉によるべきである。現代の為政者は、400年前の先覚者の将来を見据えた卓見からも、深く学んでほしいものだ。

4 詩吟の先輩が作詞した漢詩集『額田春秋』

今秋（2018年9月）、私は詩吟の先輩K氏から、『額田春秋』と題する自家製の素敵な漢詩集を頂戴した。27篇の漢詩にそれぞれ、丁寧な語釈と分かりやすい解説およびカラー写真が添えられており、その詩が生み出された際の作者の感動が素直に伝わってくる。

『額田春秋』中の漢詩の一つ、『本宮山水』（ほんぐうさんすい）で詠われている、本宮山麓の闇荊（くらがり）溪谷から流れ下る男川（おとがわ）流域の山村で、私は妻と二人、ゆったりした心地良い“老後の日々”を10数年にわたって過ごしてきた。『本宮山水』の詩を一読して、深く共鳴する味わいを覚え、田仁（でんじん）というペンネームで発表された、作者K氏の感性の素晴らしさに

感銘を受けた。その漢詩を、ここで紹介させていただこう。

「 本宮山水 田 仁
花 香 り 鳥 語 り 白 雲 懸 (か) か る
閻 刈 の 溪 流 緑 樹 連 (つ ら) な る
恵 沢 (けい た く) の 額 田 生 (い の ち) 永 々 (え い え い)
本 宮 山 水 男 川 に 注 (そ そ) ぐ 」

この漢詩に詠われているように、額田地方の緑樹が連なる本宮山麓には、多くの小沢が湧き出ており(恵沢の額田)、それらの流れは男川や乙川(おとがわ)に注ぎこんで流れ出ていく。岡崎市民が飲用する水道水の約半分は、この地域から供給されている。岡崎市民にとって本宮山麓は、まさに生命の水瓶なのだ。閻刈溪流は男川に注ぎ込み、男川が合流した乙川は、やがて岡崎城付近で菅生川(すごうがわ)と名前を変えて、矢作川に合流していく。

額田地方は、大正期から昭和半ば頃まで、林業が主産業だった。21世紀に入ってから以降は、さすがに他の地方と同様、当地でも少子高齢化が進んでいるが、そうした現状を打破すべく、現在、地域再生に向けて「木の駅プロジェクト」など、様々な地域起こしの取り組みが試みられている。何とか若い人たちが、この地方に定住できるようになってほしいものだ。その際、上記の漢詩に詠われている額田の素敵な自然環境については、是非とも維持発展させてほしい、と私は願っている。

さて、私の所属する西三河地方の詩吟組織では、例年10月上旬に秋季吟詠会を行なっている。私はK氏のご了解を得たうえ、その舞台で『本宮山水』の詩を吟じ、額田の自然の素晴らしさを聴衆にアピールしたいと思っている。

5 私の田舎暮らし寸描

先にも少し触れたが、わが家の野菜畑では毎年、10月中頃に芋ほりイベントを行なっていて、最近では40名前後の参加者があり、とても賑わう。5月の大型連休明けの時期に10人ほど、年金者組合の仲間がサツマイモ苗の植え付けに駆けつけてきてくれる他、7月には雑草取りにも手を貸してくれるので、素人農家としては大助かりである。7畝に170~180株ほど、美味さで評判の高い品種のサツマイモ苗を、隣町のJAセンターまで足を運んで入手し植えているので、参加者に持ち帰ってもらうサツマイモの数は十分にあり、バーベキューや芋汁にも舌づつみを打ってもらえる。

昼食後には室内で、年金者組合として3ヶ月ごとに開く誕生日会で、参加者同士が懇親を深め、三方を山に囲まれたわが家で、ベランダから遠く閻刈溪谷

の上に広がる山並みを眺めてもらい、ゆったりした気分で田舎生活の一端を味わってもらっている。「昨年参加したらとても楽しかったので、今年も是非参加したい」と、1ヶ月も前から参加予約の電話が入るほどの盛況で、私たち夫婦もこの芋掘り会については、とてもやり甲斐を感じている。

芋ほり会が済むと、同じく10月中旬の日曜日に私たちが住む中金町では、氏神様の秋祭り。祭の最後には、餅投げの後、午後2時ころから祭のハイライトとして恒例の、神社本宮より若宮まで神輿渡御の行列行進が行われる。行列の先頭を歩くのは、「塩撒き」役と「杖突き」役の二人の“長老”。町内の約50世帯中で75歳以上の高齢者の一人に、いつの間にか私も含まれていて、その中から選ばれる“長老”の順番だから、ということで、私には今年、昨年と同様に「杖突き」役が割り振られた。月日はいつの間にか、どんどん移り進んでゆくものだなあと、改めて深い感慨を覚えた。

おわりに

山里での田舎暮らしに身を置くようになって、14年目。毎朝、テレビ体操で身体を動かしていると時折、腕や脚、首、その他の動き方が、1年前の自分と比べて随分にくなくなっていることに気づき、びっくりすることがある。しかし、今日まで自分は達者で過ごしてこられたので、これからも、何事に対しても前向きに受け止めて生きていこうと、私は割り切って考えることにしている。現在、自分が取り組んでいる事柄のなかに、たとえささやかでも何らかの意味で他者（ひと）にも役立つと思えるものがあれば、それは自分の生き甲斐の一つとして位置づけ直せるだろう。そう考えれば、自分はまだまだ頑張れる、と思っている。

里山ハイキング、文化財めぐり、詩吟、合唱など趣味の分野、人工林間伐に関わるきこり塾、木の駅プロジェクト、登山道の案内看板（標識）整備などボランティア活動分野、等々。いろいろな世界で結ばれた大勢の友垣との交流が、黄昏（たそがれ）期にあるわが人生に明かるい光を投げかけてくれている。本当に嬉しくあるがたいことである。Everybody, thank you very much!

（元名古屋大学農学国際教育協力研究センター教授）